



TITLE:

魏晉南北朝の客と部曲

AUTHOR(S):

唐, 長孺; 川勝, 義雄

CITATION:

唐, 長孺 ...[et al]. 魏晉南北朝の客と部曲. 東洋史研究 1981, 40(2): 253-276

ISSUE DATE:

1981-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153819>

RIGHT:

魏晉南北朝の客と部曲

唐長孺著・川勝義雄譯

はじめに

- 一 客の身分低下と農業労働における普遍的使用
- 二 蔭客の特權に對する晉代の制限
- 三 永嘉の亂以後の北方における大族の蔭戸
- 四 南北朝後期の部曲と隋初の浮客

はじめに

客と部曲とは、いずれも法律の形で、その私屬としての地位を規定されていたが、數に限られたこの合法的な客と部曲だけで、無限に發展する封建的大土地所有の要求を満足させたことはかつてなく、大量の破産逃亡農民がさまざまな名稱をもつて豪強地主に依附し、「佃客」や「佃家」に充當されたのである。しかし、封建國家はこのような「私附」と「蔭庇」の合法性を決して承認せず、國家が直接支配する編戸の人丁を安定させるために、これらの逃亡農民を編戸に復歸させようと常に企てる。そこで、きわめて長い期間にわたって、一種の特殊な現象が生まれることになった。すなわち、逃亡農民から成る「佃客」や「佃家」が、一方では封建的な主人に對して強烈な人身的依附關係を帯びるとともに、他方では、この種の依附關係が逆に不安定でもある、という現象である。本稿では、史料に據って、この點に少しく説明を加えてみようと思う。皆様の批評指正をお願いするしだいである。

一 客の身分低下と農業勞働における普遍的使用

客とは元來、外から來た人のことであつて、宗族についていえば、宗族の成員でないものが客であり、鄉村についていえば、他郷の人が客である。そこには本來、なんら身分が低いという意味は含まれていない。しかし、早くも前漢時代において、奴客が連稱される例をわれわれは見いだす。⁽¹⁾『漢書』五行志には、谷永が漢の成帝をとがめて、帝は「票輕無誼の人を崇聚めて以て私客と爲す」といったことを記している。「無誼」とは品行がよくないことであり、漢の成帝の私客とは無賴遊俠の徒がお供にあてられたもので、勞働者ではなかったように見える。史籍に、兩漢の貴族豪強の門下にいる賓客が主人の權勢によって「姦利を爲し」「盜賊を作す」と記すのは、つまり谷永のいう「票輕無誼の人」にあたるであろう。⁽²⁾客の身分低下は、生活の上で、また權勢の上で、豪強に依存するところに始まり、勞働者という立場で豪強と關係を生ずるところに始まるのではない。

賓客が生産勞働に従事するのは『後漢書』馬援傳に見える。その記述によれば、馬援に従屬していた賓客の少くとも一部分は牧畜と農業勞働に従事していた。かれらはまた「田戸」と呼ばれ、收穫は馬援と半半に分けていた。⁽³⁾馬援の賓客は明らかに私屬であり、主人に驅使されて牧畜と農業勞働に従事し、戰爭の時にはまた馬援の部曲になるものであったが、これらの賓客が牧畜と農耕に従事したことは、まだ偶然性を帯びていたように見える。馬援がかれらを率いて駐屯し耕作した上林苑や、苑川の牧師苑は、いずれも馬援の私有地ではなく、賓客たちもその土地に定着してはいなかった。だから馬援の賓客は、隨從の性質をもった客から、農奴に近い分益制の小作人へと轉化する一種の過渡的形態を示している。前漢から後漢にかけての間に、この轉化はまだ決して完成されず、これらの賓客が土地と緊密なつながりをもっていたとは言えないし、また人身的依附關係の強さが結局どの程度のものであったかも明確にしがたいのである。

後漢末期には、豪強の擁する客はますます多く、人身的依附關係はいよいよ強くなって、封建的大土地とのつながりも

新しい様相をあらわしてくる。『三國志』卷三八・麋竺傳に、麋竺は「東海胸の人なり。祖世々貨殖して、僮客萬人、貲產巨億あり」という。僮客は奴客ともいわれ、その傳には麋竺がかつて劉備に「奴客二千と金銀貨幣」を贈與送附して「以て軍資を助けた」とある。この二千の奴客によって劉備は隊伍をととのえることができたのであり、かれらは劉備の部曲となつたのである。當時は、奴と客との間を嚴重に區別する必要がなかったように見える。

麋竺が擁していた萬をもつて數えられる僮客は、生産に全く従事していなかったとは考えられない。『太平寰宇記』卷二二の海州東海縣「縣理城」の條に引く『水經注』に、次の文がある。

「胸縣東北の海中に大洲あり。之を郁洲と謂う。……古老傳えて言う、此の島上の人は皆な麋家の隸なりと。今、牛欄村あり、舊と麋家の莊牧ありて、猶お之を枯（祀？）祭し、呼んで麋郎と曰う。臨祭の日に犂鉏を著け、耕鞭を執る。又た言う、初めて婦を取る者は必ず先ず麋郎に見ゆ。否れば則ち崇を爲す、と」。

この文は現在の『水經注』になく、文章も酈道元の注らしくない。『寰宇記』に誤りがあると、先人がすでに疑っているが、書名を誤つたとしても、その著者の樂史には據るところがあつたにちがいない。右の引用文に、郁洲の牛欄村には「舊と麋家の莊牧あり」というその莊とは莊田であり、牧とは牧場である。「麋家の隸」とは「僮客」にはかならず、かれらは郁洲島の麋家の莊田・牧場に置かれて、農耕牧畜に従事し、さらに代々繼承してそのままこの土地に定着してきた。さればこそ、後世その子孫がなお郁洲に住み、そのうえ「麋郎」を祭るときには、まだ「犂鉏を著け耕鞭を執つて」、かれらの祖先の身分を示さなければならなかった。「麋家の隸」が農奴により接近していることは明らかであり、麋竺の萬を數える僮客は、少くともその中のかんりの部分が生産労働に従事していたことを、これによって知ることができる。仲長統は『昌言』の理亂篇および損益篇において、漢末には「豪人」といったものがいて、かれらは郡國にまたがる大土地を所有し、農業・牧畜業・商業を經營して、群をなす奴婢と幾萬にもおよぶ「徒附」を使役し、さらに「刺客・死士」を養つて、かれらのために命を投げださせたことを述べている。仲長統がいう「徒附」とは、つまり客にちがひなく、豪

人のかかえる奴婢や徒附（すなわち奴客）は、その郡國にまたがる大土地と結びついたものであったと思われる。麿竺もまさにこのような「豪人」にはかならなかった。

建安元年（一九六）、曹操は許下に屯田を設けた。屯田民は屯田客とも租牛客戸とも呼ばれ、郡縣には所屬せず、田官の管理のもとに置かれて、上は大司農に屬していた。屯田客は國家の租調徭役を負擔しないが、その收穫については、自己の所有する牛を使用した屯田客の場合は、官と半分に分け、官の支給する牛を使用した場合には、官が六割、屯田客が四割という割合で分けた。このことによって、屯田はいわば國家の私田であり、屯田客は國家の私客ともいうべきものであったことがわかる。屯田という形は漢代の邊境に置かれた屯田を繼承しているけれども、より直接には、當時一般に行なわれていた封建的大土地經營の方式をまねたものであった。日本の宮崎市定氏は、屯田が天子の莊園という性質をもつことを指摘された⁽⁵⁾。私は、妥當な見解だと考える。

建安元年に屯田が許下に始められて以後、曹操の統治下にある「郡國には田官を列置し」て、それがあまねく領域内に及んだ。

曹魏の後期に、朝廷は租牛客戸（すなわち屯田客戸）を賞賜として公卿大臣に支給した。租牛客戸はもともと國家の賦役を負擔せず、ただ分益制の地代だけを納めていたのであるから、これが私家に與えられた後でも、ただそれぞれの私家に對して地代を納めるにすぎなかったのは當然である。そのために「小人は役を憚り、之に爲らんことを樂うもの多し。貴勢の門には動もすれば百もて數うるあり⁽⁶⁾」というように、朝廷から賜わった客のほかにも、徭役に苦しむ下層の人民（「小人」）は進んでここに身を投じ、太原一帯などでは胡人をよび入れて田客にするという事態にまでいたった。客の群れは封建的大土地にあまねく存在していたのである。

北方に廣く屯田を開いた曹操にややおくれて、孫吳もまた江南において廣く屯田を開き、そのうえ屯田客のみならず一般人民までも、賞賜として功臣に支給し、さらにその賦役を免除して「復客」と稱した。賜客と復客の數は數百に達するも

のもあり、呂蒙のごときは「潯陽の屯田六百戸を賜わる」ほど多数の客をもらい受けた。⁽⁷⁾ 國有地と私有地における客は、江南にも北方にも同様に普遍的であった。この當時、賜客・復客を通じて、私屬としての客の身分はすでに確定しており、客という名稱をもって出現した封建的從屬者はあまねく南北にゆきわたっていたのである。

たがいに對立していた二つの政權が、それぞれ異った地域において、内容と形式の同じい屯田制度と佃客制度とを同時に推し進めていたのは、決して偶然ではない。それは漢代以來の社會發展の必然的な結果であると、われわれは認めねばならない。

二 蔭客の特權に對する晉代の制限

以上に述べてきたように、前漢の中葉以來、奴客と連稱されたことは、客の身分低下のめじるしになっているが、しかし後漢末にいたるまで、法律上、客の身分低下を規定することは全くなかった。『三國志』卷二三・常林傳に、

「太守王匡の兵を起こして董卓を討つや、諸生を屬縣に遣わし、微かに吏民の罪負を伺わしめて、便ち之を收め、考責して錢穀もて罪を贖わしむ。稽遲すれば則ち宗族を夷滅して、以て威嚴を崇くす。林の叔父、客を擣ち、諸生の白す所と爲る。匡、怒りて收治し、舉宗惶怖す」

という。常林の叔父が客を鞭うったために逮捕され取調べられたのは、太守の王匡がこれを手だてに錢穀をまきあげたことによるとしても、しかし、これによって、主人は勝手きままに客を鞭うつことができなかったこと、少くともそれが「收治」するための口實になり得たことを示している。このことは、客がなお良民であったことを暗示するものではないであらうか。⁽⁸⁾

常林の叔父の場合は、はなはだ特殊な一つの例かもしれないが、この例を挙げたのは、ただ、實際には客がすでに奴と連稱されるようになって、身分は低下していたとしても、法律上では依然としてまだその現實が承認されていなかったこ

とを示すためにすぎない。これ以後、賜客や復客を通して、客の私屬としての地位が明確にきまってしまうのだが、しかし、とくに復除を許された客は別として、それ以外の、みずから豪強のもとに身を寄せた客は、私屬となつて賦役を免除されるということは決してありえなかった。『三國志』卷一二の司馬芝傳に、司馬芝が荊縣の長官であつたとき、その地の豪強・劉節を制裁した記述があることは、人のよく知るところである。司馬芝が「劉節の客の王同らを徴發して兵と爲す」ことができたのは、王同らがみずから身を寄せた客であり、法律では劉節が客を勝手にかくまう權利をもつとは認めていなかったからである。本傳によれば、劉節は賓客千餘家をもっており、荊縣の掾吏は「節の家、前後いまだ嘗つて徭を給せず」といつている。千餘家の賓客をすべて「節の家」という範圍に入れていることは、明らかにかれらが劉節の私屬だと見なされていたわけであり、實際に、千餘家の賓客は長年のあいだ劉節の庇護のもとで徭役に服していなかったものである。しかし、このような庇護は全く劉節の權勢によるものであつて、朝廷がとくに許したわけでは決してなく、司馬芝が認めなくてもよいのは當然であつた。また『三國志』卷五四の周瑜傳には、周瑜と程普の死後、孫權が敕令を下して、周家と程家の人客は「皆な問うことを得ず」といつたことを記している。ここにいう「問う」とは、人客の來歴を追迹調査して、隱藏逃亡を摘發することである。孫權が命令を出して、とくにこの兩家の人客について「問うを得ず」と言いつてゐるのは、その他の家の人客は「問う」ことができたことを示すのではないであらうか。そして、もしこの命令が出なければ、周と程と兩家の人客も、當然「問う」ことができたのであつて、賜客と復客以外の、みずから身を寄せた客は、不法なものと思はれていたこと、たとえ功臣・大將といえども、孫權の命令がなければ、その人客を庇護できなかったこと、を知ることができる。

貴族豪強が、とくに許された場合を除いて、みずから私屬を招き入れることは認めない、というこの原則は、以後も基本的に改められなかったのである。

租牛客戸を公卿に賞賜したのは司馬氏が權力を掌握した後のことであつたかもしれず、またそのころは貴勢の家が徭役

を忌避する小民や胡人を招募して田客にすることを放任していたとしても、しかし、西晉政權がひとたび確立されるや、ただちに貴族豪強が客の群れを擴大しつづけることに對して齒止めをかけた。『晉書』卷九三・外戚傳中の王恂傳に

「河南尹に累遷す。……（ここに先に述べた「魏氏、公卿已下に租牛客戸を給す云云」のことを記す）……。武帝位を踐む

や、詔して客を募るを禁ず。恂は其の防を明峻にし、部する所、敢えて犯す者なし。咸寧四年（二七八）卒す」

とある。『太平御覽』卷二五二に引く晉起居注によれば、武帝の咸寧三年（二七七）に王恂は河南尹に任命された。かれが在任中に募客の禁令を嚴格に執行したというのは、咸寧三年から四年にかけてのことであつたにちがいない。そのときは司馬炎が帝位についてから、すでに十年以上すぎていた。『晉書』食貨志によると、泰始五年（二六九）正月癸巳の詔赦の中で、「豪勢は寡弱を侵役して私相置名するを得ず」といつている。「私相置名」というのも、自分勝手にこっそりと姓名を記録して私屬の地位に置く意味であるから、この禁令は王恂傳に「詔して募客を禁ず」とあるのと同じことを指すように見える。泰始五年から咸寧三年まで（二六九～二七七）、すでに八年の長きにわたつて、王恂は禁令を施行することに努めてきたのであり、當時この問題についてかなり眞剣にとりくまれていたことがわかる。『晉書』卷三七の高陽王睦の傳に、

「咸寧三年（二七七）、睦は使を遣わして國內（睦が初めて封ぜられた中山國のこと）の八縣に徙るものを募らしめ、逋逃・私占および姓名を變易して復除を詐冒せる者七百餘戸を受く。冀州刺史の杜友、奏すらく、睦は逋亡を招誘す、宜しく國に君たるべからずと。有司奏すらく、事は赦の前に在り、應に原すべしと。詔して曰く、……其れ睦を貶して縣侯と爲せ、と」。

司馬睦の罪名は、總じていえば「逋亡を招誘した」という罪である。七百戸以上がすべて「逋亡」つまり逃亡者であり、よび集めてきては、これを勝手に占有し、そのまま私屬にしたのであつて、その中には名を變えて、徭役免除になった人の替え玉となっているものもいたのである。ここにいう「募徙」や「私占」は、その性質を考えてみれば、つまり「募

客」であり、また「私相置名」にも相當する。この事件は咸寧三年におこり、王恂はまさにその年に河南尹に就任した。司馬睦を摘發したのは冀州刺史の杜友であるが、かれも王恂と同様に、募客に對する禁令を嚴格に執行したのである。司馬睦に對して、有司は相談のうえ、「應に原すべし」と上奏したが、武帝はやはり爵位をおとす處分に附した。これによつても、禁令はまだ空文化していなかったことがわかるのであつて、晉のはじめに戸口が増加したのは、これと關係があるように思われる。⁽⁹⁾

その後二年を経て、太康元年(二八〇)に晉は吳を滅ぼすと、すぐさま戸調式を頒布し、その中で各クラスの官員が佃客と衣食客を保有しうることについての基準を規定した。衣食客とは、主人から衣食を供給されて、從者にあてられたり、雜役に驅使されたりしたものにちがいない。佃客は、『隋書』の食貨志にいうように、「其の穀は大家と量分」したところの分益制の小作人である。あらゆる客は、みな獨立の戸籍をもたず、ただ主人の戸籍の下につけて記入されたことは、『隋書』食貨志に「客は皆な家籍に注す」というとおりであつて、その依附從屬關係は明白である。

戸調式に規定された基準内の客は、公けに合法と認められたものであるが、その數は甚だ少い。一品と二品の官員では佃客五十戸とあるが、これは十五戸とあるべきところを逆にして誤まつたのであろう。なぜなら、三品では十戸、以下八品・九品になると一戸しか認められていないからである。この規定數が當時の封建的大土地所有の狀況に適應できなかったことはいうまでもない。先に述べたように、曹魏の末期には貴勢の家が保有する佃客は「動もすれば百もて數うる有り」という狀況であつたし、晉のはじめには「詔して募客を禁じた」とはいうものの、すでに所有している客をあとからとりあげたことも聞かない。わずか二年前には、司馬睦が逋逃の七百戸を招誘したこともあり、この基準定數が有効に執行できたとは信じられない。それは、同じ法文に規定された各クラスの官員の占田數が有効に執行できなかったのと同様であるが、しかし、效果はなかつたけれども、歴史的な意味はそれなりにもつてゐる。第一に、それは、魏晉時代における大量の逃亡農民の行く先が豪強にたよつて佃客になることであり、その數の多さが晉の武帝にこの問題の深刻さを注意

させずにおかなかったことを明示している。西晉政權が確立されてから、最初に募客を禁じ、「私相に置名する」ことを禁じ、ついで蔭客を制限してその基準を規定するという、これらの客に對する措置は、それ以前になかったことであり、それは、客が全國の人口において占める巨大な比率と、農業生産におけるその役割とをきわめてよく反映しているといえよう。第二に、それは、規定された基準以内の客と、規定以外にとくに徭役免除を許可された客だけを除いて、それ以外の私的に占有された客は法に違反したものであり、したがって、勝手に身を寄せることによって作られた依附從關係は不安定なものであったことを示している。

第二回目の限客規定は東晉においてあらわれる。『南齊書』卷一四・州郡志の南兗州の條に、

「時に百姓難に遭いて、此の境に流移す。流民は多く大姓に庇せられて以て客と爲る。元帝の大興四年（三二二）、詔して流民の籍を失えるものは、名を條して有司に上らしめ、給客の制度を爲る。而れども江北は荒殘して、實を檢すべからず」

とある。大興四年は東晉政權が成立して以後の重要な年であつて、晉の元帝はこの年に王氏を抑え、豪強の利益を侵犯する一連の措置を實施して、王敦の亂をひきおこしたのであつた。徐州の流民を調査して給客制度を施行したのは、これらの措置の一つであり、「流民多く大姓に庇せられて以て客となる」というのは、みづから身を投じて庇護を求めてきたものであること、いうまでもない。給客制度は大姓がこれを勝手に占有するのを制限し、新たに客の占有基準を示して、身を投じてきた客を法律の枠内におさめたものにはかならない。『隋書』卷三二・食貨志の記載によれば、各クラスの官員が品級によつて客を占有できる基準は、西晉の基準に比べて増加しており、第一品と第二品では佃客を四十戸以上もつてはならず、以下、品ごとに五戸ずつ遞減して、第九品になると五戸と規定されている。この規定は大興四年の給客制度だと私は考えている。『隋書』の食貨志には、客にみな課役がないこと、佃客は收穫の何割かを主人に地代として納めることが、はっきりと記載され、また「客は皆な（主人の）家の籍に注す」とあつて、佃客が農奴に近い分益制の小作人であつ

たことを示している。

東晉の給客制度はもとより空文と化し、その翌年、王敦が南北の大族に支持されて兵を擧げ、建康に入城したために、前年に頒布されたところの、豪強の利益をそこなう施策は、當然執行できなかったにちがいない。

その後、大量の逃亡農民が私門に流入するのを正しく押しとどめることはできなかったけれども、逃亡農民がみずから身を私門に寄せてこれにたよることと、豪強がこれを勝手に庇護することは、終始非法な行爲であった。『晉書』卷四三・山遐傳に、東晉の「豪族は多く戸口を挾藏して以て私附と爲し」ていたが、山遐は會稽郡餘姚の縣令になり、「縣に到って八旬のうちに、口を出だすこと萬餘」であったという。その地の高貴な家柄に屬していた非常な名士の虞喜は戸口を隱匿して、法によれば死刑に處せられるはずであったが、結局、虞喜は何ごともなく安穩にすみ、山遐が逆に官位を失うことになった。考えてみると、餘姚は土地が廣く、人口は少く、劉宋時代に孔靈符は、山陰縣の貧民を餘姚・鄞・鄧の三つの縣に移住させて湖田を開墾せようと建議したことがあった。⁽¹¹⁾東晉時代の餘姚の人口は宋代より多いはずはなかったのに、そこで八十日以内に檢出した隱匿人口が萬餘という多さに達したのは、まことに龐大な數字である。山遐傳によれば、隱藏された戸口はすべて大姓の私附である。會稽郡の大姓である虞・魏・孔・賀のうち、虞氏は餘姚の人であり、山陰縣の貧民を移住させるよう建議した孔靈符は、「産業はなはだ廣し」といわれた大土地所有者であった。⁽¹²⁾したがって、萬をもって數えられた「私附」の多くは、かれらの佃客であったと推定してよからう。

山遐が餘姚令であったのは、晉の成帝の咸和・咸康年間のことであり、太興四年(三三二)に給客制度が頒布されたときから十年あまりたっている。給客規定が實行されていなかったことは明らかであるが、豪強が私附を隱藏してはならぬという條文は、少くとも法律上なお有効であった。山遐は一介の縣令であって、そのとき地方官に「私附」の取締りを命ずる詔敕が出されなかったにもかかわらず、かれが管轄内で嚴重な摘發を行なったのは、地方官が本來戸口取締りの責任を負っていたからであり、募客禁止などの法令がまだ決して效力を失ってはいなかったからであって、さればこそ虞喜は法

に照らして死刑に處せられるはずだったのである。このとき山遐が失敗したのは、國家を背負う宰相が王導であり、王導は江南の大族と親密な關係を結ぶように一貫して主張していたからである。⁽¹⁴⁾

その後、豪強の戸口隱匿に對してかなり有効に制裁を加えたのは、晉の末期に劉裕が實權を握っていたときのことである。亡命千餘人を藏匿していた餘姚の虞亮を、劉裕は死刑に處した。虞亮は、虞喜の直系の子孫ではないとしても、同族の後輩である。虞亮は、八十年前にかれの祖先がやったのと同じことをしていたにすぎないが、かれは先祖のような幸運にめぐまれず、命をおとしたのである。

劉裕が、「亡命を藏匿した」罪によって會稽第一流の名門虞亮を死刑に處したような例は、おそらく晉初以來、法によつて處斷した最初の例であり、またこれが最後の例でもあらう。これ以後、唐代にいたるまで、逃亡した戸口や蔭客の取締りのことはしばしば史籍に記されているが、ただ逃戸を本貫にかえしただけで、これを庇つた豪強に對する懲罰のことは見えない。

南朝に入つてから、封建的大土地所有制はますます發展し、逃亡するものはいよいよひどく、佃客の群れがそれに應じて擴大していったことはいふまでもない。梁代に賀琛が指摘したところによれば、「百姓は命に堪うる能わず、各おの流移を事とし、或いは大姓に依り、或いは屯封に聚まる」さまであった。⁽¹⁵⁾屯封とは、封禁された山澤のことであり、官有のものも私有のものもあるが、主としてそれは豪強が山澤を廣く占有して經營する方式のものであるから、「大姓に依る」と「屯封に聚まる」のとは、基本的に一致する。そのころ客は、ときには別の名稱をもつてあらわれる。南齊のとき、「諸郡の役人^{えき}は多く人士に依つて附隸と爲る。之を屬名と謂う」とあり、⁽¹⁶⁾陳代には王公百官が、逃亡したものを招き入れて「程蔭」と稱した⁽¹⁷⁾ことなどがそれである。そのとき、朝廷はもはや晉律を襲用して豪強を懲罰にかけようとは考えなかつたけれども、南齊の東昏侯はなお「屬名を檢正せん」と思い、陳の宣帝も「程蔭」を「本屬に解還し」ようとしたのであつて、逃亡者がすすんで身を大姓に寄せることと、豪強がこれを蔭庇する權利は、依然として認められていなかったの

である。

ここで注意すべきことは、宋の大明五年（四六一）から南齊の永明八年（四九〇）まで、三十年の長きにわたって斷續的に戸籍検査が行なわれ、それがまた一度の暴動をひきおこしたことである。しかし、その主目的は、身分を士族と偽っている寒門を取締ろうとしたものであって、徭役に徵發しうる對象をひろげる目的ではあったが、その矛先が豪強に身を託して庇護されている「私附」に向けられたものではないことを注意しなければならない。

三 永嘉の亂以後の北方における大族の蔭戸

西晉の永嘉の亂のあと、北方にもとからあった地方組織は破壊され、新しい統治機構がまだ確立されていなかったとき、根強い基礎をもつ宗族・郷里が當時もつとめたよるべき力をそなえた基層社會であった。そのころ北方では塢壁がいたるところにできており、塢壁に集まった民衆の基盤と、かれらを相互に結ぶ紐帶は、宗族・郷里にほかならなかった。塢主は、かれが統率する群衆に對して、家長であり、また領主でもあったし、そこに集まった群衆はすべてかれの領民であり、またその子弟や賓客の家族を含めて組織された武裝集團が、家兵あるいは部曲の集團であった。かれらは塢主の統率のもとに戰鬪と生産とに従事した。塢壁は戰時における特殊な組織であつて、長期にわたる戰亂の間に、ときには興り、ときには滅びたが、北方が統一に向かうにつれて、消滅したり、みずから解散したりしていった。

塢壁がなくなつても、なお宗族組織は存在しつづけた。北魏の前期には郷官を置かず、宗族を基礎とする宗主督護制を作つたが、これは北方の實情を承認したものであり、鮮卑拓跋部の貴族たちに理解しやすい基層社會の組織形態でもあった。

『晉書』卷一二七・慕容德載記に、南燕のとき、尙書の韓諱が上疏して戸口を取締りを建議し、「百姓は秦晉の弊に因つて、迭いに相ひ蔭冒し、或いは百室もて戸を合わせ、或いは千丁もて籍を共にし、城社に依託して、燠麤を懼れず、公

けに課役を避けて、擅いままに姦宄を爲す」といったことを載せている。「百室戸を合し、千丁籍を共にす」の句は、南燕のときに一戸の人口がはなはだ厖大であったことを明示しており、實際に、一家族の中に「公然と課役を避ける」多くの蔭戸を含んでいた。このとき韓諱が南燕の領域内で検出した蔭戸の數は、五萬八千の多きに達している。大戸が多くの人口をかかえこむこのような形が、韓諱によれば、「秦晉の弊に因る」ということは、その由來が久しい上に、それが北方にあまねく存在していたらしいことを示している。私は、これがすなわち塙壁の組織の基礎であり、戦時になれば、ただちに宗族と賓客（蔭戸）とから成る一箇の武裝集團を形成することができたのだ、と考える。北魏の宗主督護制は、大戸が多くの人口をかかえこんでいるというこの實情のもとで作られた制度にはかならない。『魏書』卷一一〇・食貨志にいう、

「魏初には三長を立てず。故に民は蔭附するもの多し。蔭附する者は皆な官役なく、豪強の徴斂は公賦に倍す。」

「蔭附」とは、いうまでもなく韓諱のいう蔭戸であり、韓諱は蔭戸が主人に對していかなる義務を負担したかを述べていないが、食貨志には、かれらが豪強に納める地代は「公賦に倍した」ことを明示しているから、それは魏晉の佃客や南朝の「屬名」「程蔭」などが置かれた地位と基本的には同じであった。兩者の間にちがいはあるとすれば、南朝の私屬の多くは、ほかの土地から逃亡してきた農民であつたのに對して、南燕や北魏の「蔭戸」は同じその土地の人であつたかもしれない、ということであろう。

北魏が均田法を頒布し、三長制を立てた後、それまでの蔭戸は獨立し、田を受給されて公課を納めることになった。しかし、均田制が施行された後にも封建的土地私有制がひきつづき存在したことは疑いなく、孝文帝は陂田を賞賜として李冲に與えたり、咸陽王禧の「田業鹽鐵は遠近に遍ねく」存在していた⁽¹⁹⁾。ただ、それが誰によって耕作されたか明らかでないが、そのころ必ずや佃客のような大量の封建的依附農民が存在したことを推定しうるにすぎない。

『魏書』食貨志に、太和年間、屯田を設置したことを述べて、次のようにいう。

「又、別に農官を立て、州郡戸の十分の一を取って、以て屯民と爲す。水陸の宜しきを相、頃畝の數を斷じ、贓贖雜物を以て牛を市いて科給し、其れをして力を肆べしむ。一夫の田に、歳に六十斛を責め、其の正課ならびに征戍雜役を甄す。……帝、覽て之を善しとし、尋いで施行す。」

おもうに、「屯戸」は雜戸の類に屬するもので、「一夫の田」はすなわち百畝である。そのころ一畝あたり一斛の收穫があると思積もれば、官から牛を支給された屯民が「歳に六十斛を責め」られるのは、曹魏の屯田客が「官牛を持つものは官が六分を得、士が四分を得た」という地代の率に等しい。同じ『魏書』卷一一四・釋老志にも、平齊戸および諸民の中から設置された「僧祇戸」は、「歳に穀六十斛を輸して僧曹に入れた」ことを記しているが、この六十斛も「一夫の田」にもとづいて徵收したにちがいない。國家が屯戸に對し、僧官が僧祇戸に對して徵收する地代は、たんに傳統にもとづくだけではなく、また當時一般の封建的地代の額にもとづいて制定されたはずであつて、封建的大土地には屯戸や僧祇戸に類似した身分の分益制小作人が存在していたと信ずる理由がここにある。かれらがどんな名稱でよばれたかわからないが、はなはだ漠然と「僮隸」とよばれたり、ひどい場合には、奴婢という廣い名目の中に入っていたかもしれない。僮隸は、一般に戰爭での捕虜が賞與にあてられたところから由來するもので、したがつてそれは公けに認められた合法的な私屬である。均田法は明らかに奴婢の受田を規定しており、僮隸も當然、奴婢の範圍に含まれる。つまり、貴族豪強のもつ廣大な土地の中には、特に賜わつたものでなくても、奴婢（僮隸）の名目で合法的に占有できる土地があつた。受田したこれらの奴婢が、その主人に對していかなる義務を負つたか、史籍に記載はない。收穫の全部を主人にわたし、主人が奴婢の納めるべき田租を代つて支拂うとともに、その衣食を支給したとすれば、それは正真正銘の奴隸收奪形式であり、南北朝時代に、主人が直接經營する田園では往々にしてこの形が採用されていたことを我々も認める。が同時に、さらに廣大な土地には、奴婢あるいは僮隸とよばれる生産者が、事實上、封建的搾取を受けていたことは、先に述べた屯戸や僧祇戸に見えるとおりである。われわれは、魏晉以來の佃客や南燕と北魏前期の蔭戸が忽然として消えうせたと想像すること

はできないのである。

奴婢・僮隸の來源は、主として戦争によって得た捕虜を賞として與えたものから出ており、かれらは合法的な賤民であつて、奴婢という名目で受田することは、法令の規定するところであつた。そのころ、なおみずから身を豪強のもとに寄せて、その庇護を求める逃亡農民があつたかどうか。あつたにちがいないが、記録が缺けている。延昌元年（五二二）、冀州刺史であつた元暉は「丁戸を検括して、其の歸首するを聴し、調絹五萬匹を得た」。北魏の制度では、一夫一婦の調は絹一匹であつたから、五萬匹は五萬戸の調にあたり、その數は膨大である。このような多數の隱藏された丁戸がどこから來たか、傳に記載はない。あるいはかつての「蔭戸」のようなものであつたのか、あるいは年齢を勝手に増減して「老と詐り、小と詐り」、また「妄りに死亡と注した」たぐいのものか、はなはだ斷定しがたいのである。

以上に述べてきたように、北方の大族は長期の戦亂をくぐりぬけたあと、その宗族關係がいよいよ密となり、その勢力も一層強大になつたため、かれらが農民をかくまう形は、大戸のもとにおける蔭戸制になつたのである。南燕は蔭戸に對して、かつて大規模な取締りを進めたし、北魏は三長制を實施して、これまた多數の蔭戸を大戸の中からひきはなした。しかし、大族が聚居する状況には變りがなかつたのであつて、宋孝王の『關東風俗傳』が、そのような大族は「一宗にして近^{ほと}んど萬室ならんとし、烟火は連接す」と指摘しているように、大戸のもとにおける蔭戸は、ひきつづき存在していたにちがいないのである。

四 南北朝後期の部曲と隋初の浮客

部曲とは軍隊の編制を指す言葉であつて、のちに私兵を指すようになったものである。曹操の部下であつた任峻・呂虔・李典らはみな部曲や家兵を組織した。⁽²⁴⁾部曲はかれらの賓客でもあつたが、ただ軍隊を編成したときに、はじめて部曲とよばれたにすぎない。先に述べたように、麋竺は奴客二千を劉備に與えたが、かれらも劉備の部曲になつたと思われる。

そのころ、客の身分はすでに低下し、部曲も身分が低くなっていたが、當時の部曲という名稱は、身分を示す言葉ではなく、勞働者を指す言葉でもなかった。部曲が活躍するのは、普通は軍事行動が頻繁に行なわれる時期であり、建安時代や永嘉の亂のあとなどであつて、正常な時期に部曲の活動が見られるのは比較的少なかった。

劉宋時代の末期以後、國內および南北間の戦争によつて、將帥たちが廣く募兵を行なうようになると、賦役に苦しむ人民は續々と部曲に身を投じ、梁代ともなれば、ついに「大半の人は皆な部曲と爲る」という人まであらわれた。^(四) このころの部曲はきわめて數が多く、かれらの主人（將帥）に對する關係や、かれらが負擔する義務はさまざまである。名目上では、かれらは招募に應じてきた兵士であつて、戦時には主人にしたがつて作戰に加わり、平時にはその指揮を受けて各種の勞役その他の活動に従事するものであつた。しかし、實際は、部曲の中には、わずかな錢を出して軍籍に名を登録してもらい、ひとしきり從軍すれば、すぐ家にかえつて、もはや從軍もしなければ徭役にも服さず、これを軍團に受け入れた將帥と何の關係も結んでいないものもあつた。^(五) このような部曲がはなはだ少數であつたことは明らかであつて、多數の部曲は勞役に酷使されるものであつた。ただ、勞役はさまざまであつて、部曲のあるものは生産勞働に従事したが、より多くはいろいろな臨時の勞役にかりだされたこと、たとえば宋の大將・王玄謨が部曲五百人を派遣して墓を營造させようとしたごとくである。^(六) そしてまた、「耕さずして食らい、蠶せずして衣^き」ながら、將帥や守宰につき従つて、百姓を脅迫するたぐいの側近も多數いたのである。^(七)

部曲は「私附」「屬名」「程蔭」と同じではなく、かれらは公認の兵士であり、國家の賦役義務を負わないのは合法的である。かれらがひとたび身を兵籍に置くと、終身隸屬することになり、はなはだしい場合には、子孫にまでその地位を傳えることになったために、かれらが私屬という性質を帯びるにいたつたのである。しかし、その合法性は、法律がその私屬としての身分をはっきりと規定したからではなくて、逆に、かれらが公認の募集に應じてきた兵士であり、豪強に依附した「逋亡」とは異なるからにはかならない。部曲が法律上その私屬たることを認められていない以上、かれらの主人に

對する人身依附の關係は確定的ではない。主人が死亡すれば、部曲はそれもとから去ることができた。⁽⁶⁹⁾そこになお留まったものは「門義」とか「義故」とか呼ばれたが、その意味は、去ることができないのに去らず、義をもって従うものということである。部曲は終身ある將帥に隸屬していたが、皇帝はときに應じて、ある將帥の部曲を朝廷に回收することができた。⁽⁶⁰⁾

ここで注意に値いすることは、南朝の後期に部曲が農業生産に使用された例を見いだすことである。

周知のように、『梁書』卷五一・張孝秀傳に、かれが退官したのち、「田數十頃、部曲數百人あり。率いて以て田つくり力む」と記されている。これは、部曲を使って耕作したことが史籍にはっきりと記載されている唯一の例である。日本の宮崎市定氏はまた、『陳書』卷二・武帝紀の永定二年（五五八）三月の詔敕に、南豫州刺史の沈泰が「良田四百に逾ゆる有り、食客三千に止まらず」とあり、また「其の部曲妻兒は各おの業に復せしめよ」とある文によって、沈泰の所有する四百頃の良田が部曲妻兒の耕作によるものであったことを推定された。⁽⁶¹⁾以上の二例によって、南朝の後期には部曲を農業生産に使用する人がかなりいたらしいこと、推して知るべきであろう。このほか、陳の宣帝は、梁末に荒れはてた姑孰を復興するため、太建四年（五七三）一つの詔敕を下した。⁽⁶²⁾その内容の概略は、姑孰に駐屯していた諸將が任を解かれたあと、部下の一部を留めて、姑孰において商業を営ませたり、開墾に従事させたりする場合には、一律に免税措置をとるということであり、最後に、それらのものには「地を給し田を賦し、各おの頓舎を立てよ」とある。詔書にいう「諸將の部下」とは部曲にはかならず、これらの「部下」は、少數のものが商業を営んだほかは、多數のものが荒地を開墾したわけであり、「地を給し田を賦し、各おの頓舎を立て」られてからは、そこに定住して、もはや所屬する將帥にしたがってあちこちに動きまわることはなかった。詔書には、こうして留まった部下が一般の戸籍につけられて百姓になったとも書かれておらず、租税の免除にも期限がついていない。かれらは依然として諸將の部下であり、身分には變更がなかったらしい。もしそうだとすれば、商業を営んだものの以外の、殘留した大多數の部下は、すべて農業労働者として、所屬する將

帥に對して義務を負つたことになるが、ただ開墾した田は、そのまま耕作した部下に與えられたようであるから、その身分がどうなつたかを斷定することはなほだ難かしい。

部曲の身分について、南朝では明確な規定がついに見えず、法律上、部曲が賤民の名稱になるのは北周からはじまる。

北魏時代に部曲の語が見えることは、非常に少いが、その末期の大亂に際しては、勃海の高氏のごとき地方の大姓は部曲を擁していた。しかし、かれらは作戰に用いらただけであり、かれらの來歴はおおむね「郷閭を招集する」ことからくるのであつて、部曲の東方老などは、以前には「輕險の徒と結んで共に賊盜を爲し」ていたものであつた。このような部曲は、ただ私兵といつてよいものである。はじめて部曲の身分が確定されたのは、北周末期のことであつた。『周書』卷六・武帝紀に載せられた建德六年（五七七）十月の詔敕に、

「永熙三年（五三四）七月より已來、去年十月已前に、東土の民の抄略されて化内に在つて奴婢と爲る者、及び江陵を平げし後、良人の沒せられて奴婢と爲る者は、並びに宜しく放免し、所在に籍に附して、一に民伍に同じからしむべし。若し舊主人の猶お共居するを須^もうるものは、留めて部曲及び客女と爲すことを聽^{きこ}す。」

とある。詔書の示すところによれば、奴婢は釋放して、完全に良人にすることもできたし、また留めて部曲・客女にすることもできたが、部曲・客女が主人と共に居るとは、籍を共にすることにほかならず、かれらは晉代の佃客と同様に、獨立の戸籍をもつことなく、ただ主人の戸籍の下につけて登録されたのであつて、その身分は奴婢より高いけれども、「一に民伍に同じい」わけにはいかなかった。

南朝では、部曲は將帥に終身隸屬していた兵士であり、したがつて私屬という性質を帶びていたが、その私屬としての身分が法律によつて確定されていたかどうかは明らかでない。建德六年の詔敕はこの點をはつきりさせたものである。さらに、以前に我々が史籍の中で見てきたところの、部曲に関する記載は、その大半が軍隊編制と關連しており、賓客から成る私兵も、塢主が統率した武裝集團も、招募に應じてきた士卒も、すべて部曲とよばれていた。この詔敕によれば、奴

婢が放免されても、主人が「猶お共居せしむるを須うる」場合には、これを留めて部曲・客女にしたのであるが、それは決してかれら（男丁）を軍隊に編入するためではなかった。この點が以前のものとちがうところである。

東晉の末期に「奴を免じて客と爲し」たことを、われわれは見てきた。⁶³いま、奴を免じて部曲とし、また婢を免じて「客女」としたことは、部曲の身分が客に相當することをはっきりと示している。

右の詔敕によって釋放された奴婢は、すべてもと捕虜にされたものであって、その一部は東魏・北齊から抄略され、他は江陵からの捕虜であつた。東魏・北齊領域から略奪されてきた奴婢の數はわからないが、江陵における捕虜で奴婢にとされたものは十餘萬にのぼっている。⁶³『顏氏家訓』勉學篇で顏之推は、梁代において讀書しなかつた士族の子弟たちが、亂離（つまり江陵の敗戦）ののち、「百世の公卿」であつても、「田を耕し馬を養わざるは莫し」という狀況に置かれたことを歎いている。これによって、奴婢におとされたこれらの捕虜が、農耕牧畜の生産勞働に従事していたのを知ることができる。

北魏の均田法によれば、もともと奴婢は受田して公課を納めるものであって、このことは西魏の大統十三年の計帳によつて實證されており、北周もこの制度を踏襲したはずである。とすれば、建德六年以後の部曲・客女は受田されたのである。先にわれわれは、奴婢の名目で受田したものが必ずしも奴婢だけに限られなかつたろうと推論したが、部曲・客女の受田も、僮隸などの受田と同じであつた。『隋書』卷二四・食貨志に記された隋初の「新令」で、租調の規定は、丁男一牀に租粟三石、桑土の調は絹絁一疋に綿三兩を加え、麻土の調は布一端に麻三斤を加える、とされ、つづいて「單丁および僕隸は各おの之に半ばす。未だ地を受けざる者は皆な課せず」という。以前の田令を見れば、そこにはすべて奴婢が受田する畝數と、納めるべき課調の額を記しているのに、隋令だけが「僕隸」と稱しているのは、部曲・客女が奴婢から放免されたものであつたから、以前のようにそのまま奴婢という名目で受田させることができなかったからではないだろうか。同じ『隋書』食貨志にはまた、煬帝が即位したのち、「乃ち婦人および奴婢・部曲の課を除く」とある。先に引

用した隋初の新令に「未だ地を受けざる者は皆な課せず」というのによれば、受田してはじめて租調を負担することが明確に示されており、いま婦人・奴婢・部曲の課を免除したという以上は、それらの人びとがこれ以前には受田していたこと、そしてこのときから田を授けられなくなったこと、を意味する。唐の武徳七年（六二四）の令では、婦人・奴婢・部曲は田を受けず、また課せられることもなかった。史學界では一般に、それがこの隋の制度をうけついだものと認めているのは、理由なしとしないのである。

もし以上の推定に誤まりなく、周隋の交の部曲・客女が奴婢と同様に受田していたとすれば、放免した奴婢を留めて部曲・客女にすることを許したのは、主人の土地が奴婢の放免によって損失を受けないことを保證したのであり（北魏の均田法の「奴婢と牛は有無に随つて以て還受す」という規定を、北周は踏襲したはずである）、また、主人のために田を耕し馬を養う奴僮が、ひきつづき主人の土地で勞働することを保證したものであった。これによって當然、身分に變化が生じたが、これらが受ける搾取と待遇に變化がおこったかどうかについては全くわからない。

この當時、部曲は軍事と必然的な關係を全くもたず、かれらの大多數は封建的大土地で勞働する直接生産者であった。かれらの主人に對する人身依附關係は強く、また牢固たるものであった。後の唐律に見えるところの、部曲に關する詳密な條文は、必ずや周律・隋律の踏襲であり、發展であつたにちがいない。そのころの社會には、疑いもなく、かなりの數にのぼる部曲が存在していたにちがいない。さればこそ、統治にあたるものが、法律の形でかれらの低い身分を固定させる必要ありと認めたのであつた。

周隋の間は、北方において部曲制がさかんに行なわれた時代であつたが、當時の封建的大土地における勞働者は、依然として主に逃亡農民が非合法に身を寄せてきたものから由來していた。

隋代に高類は輸籍の定式をつくり、定式にのっとりて戸を確定した。『通典』卷七・丁中に、このことが次のように論述されている。

「隋は周の禪を受け、戸三百六十萬を得たり。開皇九年、陳を平ぐるや、又た戸五十萬を收む。大業二年に洎んで、干戈用いられざること唯だ十八載にして、戸八百九十萬あり。其の時、西魏の喪亂、周・齊の分據を承け、暴君慢吏ありて賦は重く役は勤し。人は命に堪えず、多く豪室に依る。禁網は驟系して、姦僞もつとも滋し。高頴は流冗の病を覩て、輸籍の法を建つ。是に於て其の名を定め、其の數を軽くし、人をして浮客と爲れば疆家より大半の賦を收められ、編氓と爲れば公上を奉じて輕減の征を蒙ることを知らしむ。先に其の信を敷き、後に其の令を行なう。姦庶は恵を懷い、姦は容るる所なし。隋氏の資儲、天下に遍ねく、人俗康阜なるは、頴の力なり。」

この文中に杜佑はまた「浮客」の注釋をつけ、

「浮客とは公税を避け、強豪に依りて佃家と作るものを謂う也」

といっている。豪強に依附するところの浮客から成るこのような佃家が、前代の佃客・屬名・蔭戸などを繼承すること、かれらがみずから豪強に身を寄せた逃亡農民であつたことは明白である。杜佑は高頴を高く評價して、こういっている。

「高頴は輕税の法を設け、浮客は悉く自ら編戸に歸せり。隋代の盛んなるは實に斯に由る。」

杜佑は、隋代の隆盛が高頴の設けた輕税の法によつて、浮客が國家の戸籍に復歸したことに求めているのである。高頴が輸籍の法を定めたのは何年のことか、杜佑は言わない。『隋書』食貨志はこれを開皇三年（五八三）から九年（五八九）の間に置き、「大索貌閱」の後に記しているが、「大索貌閱」が結局何年のことであつたかの問題は複雑であるから、ここでは詳しく考えないことにする。『資治通鑑』卷一七六は輸籍の法を至德三年（『隋の開皇五年』五八五）にかけるが、別に據るところがあつたのかどうか、わからない。ともかく、輸籍の定式が頒布されたとしても、浮客が戸籍にもどつたのは、必ずしもこの年であつたわけではない。杜佑自身、大業二年（六〇六）の戸口増加を浮客がもつてきた結果だとしてゐるのであり、食貨志には開皇十二年の條に「時に天下の戸口、歳としに増す」と記されている。開皇年間には浮客が續々と國家の戸籍にもどつてきたと考えれば、まず誤りないであろう。杜佑の言いかたに照らせば、東西魏の分立時代から隋

の文帝の治世までの約五十年間は、浮客に由來する佃家が豪強の所有地における主たる労働者であったことになる。このような依附關係は、以前と同様に、法律で認可されたものではなく、國家はいくつかの措置を通して、これらの浮客をふたたび國家の戸籍にもどしたのであった。

杜佑が隋代における戸口増加の原因を、完全に「浮客自ら歸す」ことによるとしたのは、明らかに誇大である。それに浮客は、そのすべてが必ずしも「強豪に依つて佃家となった」わけではなかったが、しかし當時の豪強の封建的所有地に、浮客から出た大量の佃家が存在していたことは信じてよいだろう。

以上に述べてきたように、周隋の閒には、北方に二種類の封建的依附農民が存在していた。一つは公けに認められた合法的な部曲であり、もう一つは、浮客から成る佃家であつて、後者が主なものであったのである。

註

- (1) 『漢書』卷六七・胡建傳「蓋主聞之、與(丁)外人・上官將軍、多從奴客往、犇射追吏、吏散走」。また同じく卷二七中之上・五行志の「貌不恭」の項に「成帝……好爲微行出游、選從期門郎有材力者、及私奴客、多至十餘、少至六人……」とあり、ついで本文に引く文が見える。

- (2) 唐長孺『魏晉南北朝史論叢編』一〇頁の注(1)参照。このような賓客は以後にもなおひきつづいて存在する。

- (3) 『水經注』卷二・河水の苑川水の條に、「苑川水地爲龍馬之沃土、故馬援請與田戸中分、以自給也」とある。

- (4) 文中の「枯祭」の字は嘉慶八年重刊本では「犯祀祭」の三字に作る(譯者補)。

同じ『太平寰宇記』卷二二の海州胸山縣牛欄村の條に引く郡

- 國志には、「麋竺放牧之所、今民祭猶呼云麋堆」とある。現在の『後漢書』郡國志を見ても、この文はない。

- (5) 宮崎市定「部曲から佃戸へ(上)」、『東洋史研究』第二九卷第四號・三二頁。

- (6) 『晉書』卷九三・外戚王恂傳。

- (7) 拙著『魏晉南北朝史論叢』二五頁。

- (8) 『唐律疏議』卷二二の鬪訟には「良人が他人の部曲を毆傷殺する」條と「諸て總麻小功親の部曲奴婢を毆る」條の律文があるが、自分の部曲を毆つた場合の文がない。ただ「部曲を毆つて死に致らしめた」場合の律文に、「諸て主が部曲を毆つて死に致らしむれば、徒一年。故さらに殺せば一等を加う。其の愆犯あり、罰を決して死に致せるもの、及び過失もて殺せる者は

各おの論ずる勿れ」とあることから、主人は部曲を殿殺した場合にはじめて有罪となるが、それでも徒一年にすぎず、「もし部曲に愆犯があったために、罰を加えて死に至らしめた場合や、過失で殺した場合」は處罰されなかったことがわかる。常林の叔父はただ「客を搦った」だけで、死傷のことはいわれない。唐律に照らして、客がもし賤民であったならば、罪ありとされるはずはなかったのである。

- (9) 『通典』卷七・戸口の條に「蜀劉禪炎興元年則魏常道卿公景元四年（二六三）歲次癸未。是歲魏滅蜀。至晉武帝太康元年（二八〇）歲次庚子、凡一十八年。戶增九十八萬六千三百八十一、口增八百四十九萬九百八十二」とある。『通典』がいう數は、晉が吳を滅ぼす以前の晉の領域内において増加した戸口數である。

- (10) 南兖州は、東晉のはじめには徐州の一部であった。

- (11) 『宋書』卷五四・孔靈符傳。

- (12) 同右。

- (13) 山遐が餘姚令であったとき、本傳によれば、會稽内史は何充であった。『晉書』卷七七・何充傳には、咸和四年（三二九）に蘇峻の亂が平定されたあと、何充は二つの官職を歴任して、はじめて會稽内史に遷っており、また、會稽内史に在任中に「徴士の虞喜を薦め」ている。同書卷七・成帝紀には、咸和八年（三三三）四月に「處士の尋陽の翟湯と會稽の虞喜とを徴し」ている。これによれば、咸和八年ごろ何充は會稽内史であったし、山遐が餘姚令であったのもこのころのはずである。

- (14) 『晉書』卷七三・庾翼傳に、山遐が官を罷免されたことを敘

べて、これらは「皆な前宰の愾謬」によると、名ざして責めている。「前宰」とは王導をさす。

- (15) 『梁書』卷三八・賀琛傳。

- (16) 『南史』卷五・齊本紀下の東昏侯紀。

- (17) 『陳書』卷五・宣帝紀の太建二年（五七〇）八月の詔敕。

- (18) 『太平寰宇記』卷九・鄭州管城縣李氏陂の條に「李氏陂在縣東四里。後魏孝文帝以此陂賜僕射李冲」とある。咸陽王禧については註(2)を見よ。

- (19) 『北齊書』卷四・文宣帝紀に、天保二年（五五一）九月、

「詔して諸もろの伎作・屯・牧・雜色役隸の徒を免じて白戸と爲せ」とある。白戸とは普通の百姓・良人のことであるから、屯戸の地位が低かったことがわかる。

- (20) 「一夫百畝」は古代に常に見える計數である。司馬法に「畝百爲夫」といい、『漢書』食貨志に引く李悝の説に「今一夫挾五口、治田百畝」といい、晁錯の「貴粟」の上疏にも「今農夫五口之家、其服役者不下二人、其能耕者不過百畝」という。また『魏書』食貨志に載せる太和均田令では、十五以上の男夫が受ける露田四十畝、倍田四十畝に桑田二十畝を加えると、これも百畝である（婦の受田は計算に入れない）。

- (21) 『魏書』卷二一上・咸陽王禧傳に「奴婢千數、田業鹽鐵遍於遠近、臣吏僮隸相繼經營」とある。「臣吏」とは王國の家臣と吏員を指し、管理し監督するものであろうから、「僮隸」が勞働するものである。「僮隸」には奴客に類するものがあつて、それは賤民に對する泛稱である。隸は隸戸であつて、『魏書』には、俘虜を隸戸として功臣に賜與したことが見える。

- (22) 『南齊書』卷三八・蕭景先傳および『顏氏家訓』止足篇。
 (23) 『魏書』卷一五・元暉傳。
 (24) 『三國志』卷一六および卷一八のそれぞれの本傳を参照。
 (25) 『文苑英華』卷五七四に見える何之元の「梁典總論」。
 (26) 『南史』卷七〇・循吏の郭祖深傳。
 (27) 『宋書』卷五七・蔡興宗傳。
 (28) 註(24)の何之元「梁典總論」。このような部曲は、その中の一部にすぎない。何之元が、あらゆる部曲はこのようなものだとして認めているのは、明らかに事實に合わない。
 (29) 『南齊書』卷三八・蕭景先傳。
 (30) 『宋書』卷五七・蔡興宗傳。
 (31) 宮崎市定「部曲から佃戸へ(上)」(『東洋史研究』二九卷四號・四一頁)。
 (32) 『陳書』卷五・宣帝紀の太建四年閏月の條。
 (33) 『北齊書』卷二一・高乾およびその弟の高昂・高季式の傳を

参照。州刺史となった高季式は、「自ら部曲千餘人を領していた」が、本傳はそれが「私軍」だと明言している。
 (34) 『晉書』卷六四・會稽王道子傳に附せられたその子の元顯傳。
 (35) 『周書』卷二・文帝紀下に載せる魏恭帝元年の條。

〔譯者附記〕 本稿は一九八一年三月一日、東方學會と京都大學人文科學研究協會共催のもとに同人文科學研究所において行なわれた講演「唐代の客と部曲」の原稿の前半を、唐長孺教授の諒承を得て譯出したものである。その後半部は頁數の關係でここに掲載できなかったが、新出吐魯番文書に見える部曲の問題や、教授の結論がその後半で述べられている。「唐代の部曲と客」と題して『東方學』第六三輯に譯出掲載される豫定の、その後半部は、これと一連の原稿であるから、それを是非とも参照して下さるようお願いする。

Dynasties. When the Ming 明 was founded, and China thereby entered a phase of absolute monarchy, monks were completely subordinated to the secular powers, and there were no changes during the Qing 清 Dynasty.

FEUDAL DEPENDENTS CALLED *KE* 客 AND *BUQU* 部曲 IN THE WEI 魏, JIN 晉, SOUTHERN AND NORTHERN DYNASTIES 南北朝

TANG Chang-ru

This is a translation into Japanese from the first half of the Chinese text written by Prof. Tang Chang-ru of Wuhan 武漢 University who presented briefly its contents and those of the second part on March 11, 1981 at the Research Institute for Humanistic Studies of Kyoto University.

The author states at first that in the period of the Three Kingdoms a great many bankrupt peasants had been drawn under the control of the landlords (*haoqiang* 豪強) as their dependents called *ke* 客 or *dianke* 佃客, and that such a social situation persisted and developed further in South China until the end of the Southern Dynasties, as well as in North China until at least 485 A. D. On the other hand, the government of the Jin dynasty specified by legislation the number of dependents the landlords could have, and it made an effort to bring them back under its direct control. The result was not very successful, but we should pay attention to the fact that the succeeding dynasties never stopped enforcing the law. In 485, the government of the Northern Wei 北魏 Dynasty established two systems of law called the *Sanzhangzhi* 三長制 and the *Juntianzhi* 均田制, which enabled it to get back a great many tenants under its control and to levy taxes on them in exchange for giving them a fixed field. It is difficult, indeed, to find the existence of *ke* in the historical materials at that time, but if we call to mind the fact that the *Juntianzhi* allowed the landlords to have some fields under the name of their slaves, it would seem certain that the slaves were mixed in reality with the tenants called at that time *tongli* 僮隸. The meaning of *tongli* is equal to *puli* 僕隸 who were allowed to receive their fields by the law established at the beginning of the Sui 隋 period. The title of *puli* contained surely the *buqu*, the lowly

class who had been emancipated from slavery by the edict promulgated in 577 by the Emperor Wu 武帝 of the Zhou 周 dynasty. Therefore, in North China there were many feudal dependents called *tongli*, *puli* or *buqu* even after 485, and we find again the numerous *ke* in the historical texts of the Sui period. But it is necessary to keep in mind that the bonds between the landlords and their dependents were not always clearly specified in the legislation of the Six Dynasties and that this was a characteristic of Chinese feudalism.

The second part of the author's text will be translated and published in the Tôhōgaku 東方學, No. 63.

THE COMPOSITION OF THE GENTRY CLASS IN SHANGCHENG 商城 COUNTY, HENAN 河南

YAMANE Yukio

I tried in this article to analyse the structure of the gentry class in Shangcheng 商城 County at the beginning of the 19th century, by employing the namelist of contributors to the publication of the *Shangcheng xian zhi* 商城縣志, published in the Jiaqing 嘉慶 period. From this list I extracted a number of 536 persons who might be considered as the gentry, and investigated the social ranking they belonged to. I found that only 19 persons ever held an official position of rank 7 and higher, or had been successful in the *jinshi* 進士 examinations; it was clear that the greater part were *jiansheng* 監生 ('national university students') or *shengyuan* 生員 ('students').

Lately Japanese scholars doing research on the gentry usually use the expression *kyōshin/xiangshen* 鄉紳, but I suppose that those called *xiangshen* at the end of the Ming 明 were retired officials of rank 7 or higher, or retired *jinshi* ('doctors'). More than 70% of the gentry class in Shangcheng County were of the student class, and they exercised great influence in the contemporary rural society, and brought about all kinds of harm to the people. I think that in the gentry studies a distinction should be made between the *xiangshen*=higher gentry class and the lower gentry class, consisting mainly of students.